

21の講義内容 文章体の特徴を知ろうー翻訳語文ー

萩原 義雄

「翻訳小説」というものを私たちはこれまでどのように読んできたのだろうか。外国語の文学を紹介する書物には、その一つ一つを原文で読むというものは少ない。むしろ、どなたか原文を解せる能力に長けた人がこれを翻訳したものを間接的に読むことが多かるう。

なかには既に、日本語で書かれたものが最初だと思ひ込んでしまっている文学作品もあるのではなからうか。その一つとして紹介する作品資料に『西遊記』がある。

中国唐の時代、玄奘三蔵が自ら天竺から持ち帰った經典類を漢訳するのだが、この經典を持ち帰る異郷である天竺までの旅を綴った『大唐西域記』、『大唐大慈恩寺三蔵法師傳』〔弟子が編者〕が世に遺されました。この經典を持ち帰った彼の偉業は中国で継承され、やがて中国伝奇小説『西遊記』の誕生と成つていく。

現存する『西遊記』は、明時代の万曆二十年（一五九二）の序を有する世徳本が最も古いものとされ、中国での活字本もこの板本を底本にしてなつたものが主である。

この『西遊記』を日本人が実際に読んで翻訳した、その代表的な一つの資料をここで紹介しておこう。

一、江戸時代の『西遊記』

M M 303 『畫本西遊全傳』初編十冊(卷五欠、内九冊在)・二編十冊・三編十冊(最後の四編十冊を欠く、通計四十冊の内、三十冊)。初編・二編は文化(一八〇六)三丙寅三月刻成。三編は天保六歳(一八三五)乙未孟春發兌。初編・二編は江湖口木山人譯／平安吉田武然校／浪華大原東野畫。三編、岳亭丘山譯／葛飾戴斗畫。

2005.02.28 更新



全部總評

西遊記一書仙佛同源の書也。何以知之哉。曰。即以二其書一知之。彼一百回中自取經以至正果一迄首尾皆佛家之敢而其間心猿意馬木母金公嬰兒女。夾脊。雙闕。等類又無三專非二轄門述諦。豈非二仙佛合一者一乎。大抵老釋原無二道一。世尊曾言過去五百世作二忍辱仙人一。而紫陽真人。亦言乙如能忘機止慮即與二乘坐禪一相同。是言仙不能離佛言佛不能離仙也。今觀二書中一開卷即言二心猿求仙學道一而所拜之仙乃名二須菩提祖師一。按須菩提爲二如來大弟子一。神仙中初無二此名號一。即此可見仙即是佛業已顯然明白。而仙佛之道。又總不離乎二一心。此心果能了悟。則萬法歸一。亦萬法皆空也。故未レ有二悟能悟淨一而先有二悟空一。所レ謂成レ佛作レ祖皆在レ乎。此全部西遊之大旨世人未レ能參透二此旨一。請勿三漫讀二西遊記一。／文化丙寅(一八〇六)春三月 浪華書林 森本太助識

とあつて、此の書における概評を浪華書林の森本太助が「全部總評」にして載せていて、茲に「西遊記」の読み方を「せいゆうき」と訓じていることからして、初編及び二編にあつては「ゑほんせいゆ

うぜんでん」と読むことが知られる。また、内題に「繡像真詮唐三藏西遊全傳」とし、柱題には「繪本西遊記」と記載する。この『西遊記』の編纂者を茲では「仙佛同源」としている。これが三編になると、訳者が岳亭丘山になり、内題表記が「繪本西遊記」とし、「多ほん」も「畫」文字から「繪」文字に置換され、訓みを「多ほんさいいうき」としている。そして四編がマレガ文庫には所蔵されていないのでその流れは明らかでないが、この三編を引き継ぐものと推察されよう。ここで、語彙表記についてだが、三編巻七にあつて「左右訓」の語が多く散見し、巻九にも二例を確認することができる。

左右訓一覧

- 聖躬せいこうコクワノミ 「三編巻七01才④」○脈強みやくきやうツヨクにし 「三編巻七01才⑧」○緊きんキピンなり 「三編巻七01才⑨」○脈みやくシブルにして 「三編巻七01才⑨」○脈みやく孔くわうヌルクにして 「三編巻七01才⑨」○脈みやく浮ふウクにして 「三編巻七01才⑨」○隔くたわミタル、なり 「三編巻七01才⑨」○脈みやく遅ちオソクにして 「三編巻七01才⑩」○結けつムスボル 「三編巻七01才⑩」○脈みやく數すうシバくにして 「三編巻七01才⑩」○雙さう鳥てう失群しつぐんフタツノトリムレヲウシナフの症しやう 「三編巻七01才⑩」○花磁蓋くわじざんニシキデノサラ 「三編巻七02才④」○鍋臍灰くわさいかいナベノソノスミ 「三編巻七02才④」○馬溺ばねうウマノセウベン 「三編巻七02才⑧」○乾結けんけつケツシヤウ 「三編巻七03才④」○無根水むこんすいネナシミツ 「三編巻七03才⑩」○甘霖水かんりんすいコサメ 「三編巻七04才②」○心胸寬泰しんきやうくわんたいコ、ロムネユルヤカニスギ 「三編巻七04才⑦」○衛管調和ゑいえいてうくわキケツト、ノヒ 「三編巻七04才⑦」○脚力強健きゃくりきやうけんアシヤウブ 「三編巻七04才⑧」○端陽たんやうタンゴ 「三編巻七05才④」○角黍かくしよチマキ 「三編巻七05才⑤」○焦面金晴せうめんきんせいクロキカホヒカルメダマ 「三編巻七06才⑧」○娘々ぢやうくクワウゴウ 「三編巻七13才②」○大王爺だいわうやタトノサマ 「三編巻七15才④」
- ◎開路神かいろしんカウジン 「三編巻九05才⑧」◎鋼鑽きりログロキリ 「三編巻九08才⑩」

旧蔵者印としては、「潤身堂」の朱印が見えている。

《参考資料・諸本一覧》

- 繪本西遊全伝**、K、1、読本、口木山人「西田維則」、訳、初・二編、大原東野、初・二編、歌川豊広、画、初・二編、岳亭丘山「岳亭定岡」、訳、三・四編、葛飾北斎「葛飾北斎一世」、画、三・四編、初・二編、文化三、三編天保四、四編同六刊
- 01 繪本西遊記、新潟大佐野、34、刊、10冊、K
- 02 繪本西遊全伝、石川県歴博大鋸、913、56、16、刊、1冊、三編巻九存、K
- 03 畫本西遊記全傳、島根大桑原、刊、文化3、文化11、天保6、天保8、40冊、K
- 04 繪本西遊全伝、玉川大図、W913、56、エ、刊、40冊、23cm、K

WORK [111864]

【書名】 繪本西遊全伝(えほんさいいうぜんでん) K 1

【巻冊】 四編四〇冊

【別書名】 「1」 繪本西遊記(えほんさいいうき)

「2」 通俗西遊記(つうぞくさいいうき)

「3」 繡像真詮三藏西遊全伝(しゅうざうしんせんさんぞうさいいうぜんでん)

【分類】 読本

四編

【著者】 [1] 口木山人(こうぼくさんじん)「西田／維則(にしだ／これのり)訳」〈初・二編〉

[2] 大原／東野(おおはら／とうや)〈初・二編〉

[3] 歌川／豊広(うたがわ／とよひろ)画 〈初・二編〉

[4] 岳亭／丘山(がくてい／きゅうざん)「岳亭／定岡(がくてい／ていこう)訳」〈三・四編〉

[5] 葛飾／北斎(かつしか／ほくさい)「葛飾北斎一世(かつしかほくさい一世)画」〈三・

【成立】 初・二編文化三、三編天保四、四編同六刊

【著作種別】 J





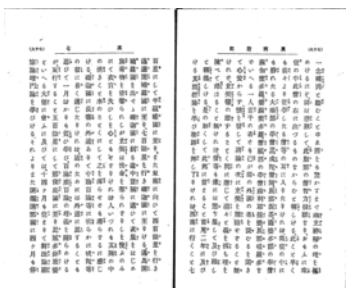
※二編の画工歌川豊広と三編の画工葛飾北斎の相違



二、明治時代の『西遊記』

幸田露伴『真西遊記』（明治二六年初版）

<http://kindai.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/886215>



三、大正昭和時代の『西遊記』

呉承恩作 村上知行 訳『ザ・西遊記―西遊記全訳』全一冊〔第三書館、一九八七年刊〕

四、平成時代の『西遊記』

高橋英二訳〔日本語・英語〕『The westward Journey』全一冊〔一九九九年刊〕

末尾の訳「…これら一切世界の諸佛、願わくばこの功德をもって佛浄土を莊嚴し、上は四重の恩に報じ、下は三途の苦を済すくい、もし見聞するものあれば、ことごとく菩提の心を発し、同じく極樂の国に生まれ、ことごとく（こゝ）に一身を報ぜんことを、十方三世一切佛諸尊菩薩摩訶薩、摩訶般若波羅密」西遊記（こゝ）に至り終わる。

平岩弓枝『西遊記』二冊〔毎日新聞社、二〇〇七刊〕

《資料書》

『西遊記』（中国古典文学挿画集成／瀧本弘之編2）〔遊子館、二〇〇〇年刊〕

目次

『西遊記』挿画一覽

資料編（新刻出像官板大字西遊記・二十卷一百回；楊東来先生批評西游記・六卷；李卓吾先生批評西遊記・一百回；鐫像古本西遊証道書・一百回）

影印収録資料：「新刻出像官板大字西遊記 20卷100回」（萬曆20年（一五九二）金陵世德堂刊本）、

「楊東来先生批評西游記 6卷」（萬曆42年（一六一四）刊本）、「李卓吾先生批評西遊記 100回」

（明末蘇州刊本）、「鐫像古本西游證道書 100回」（清初刊本）

《研究書》

『西遊記』形成史の研究、磯部彰著 ；創文社、1993.2、518、46、4p、図版12p。--（東洋學叢書；41）
〈BN09171391〉

目次

『西遊記』研究小史

唐前半期における唐三藏伝説の発生とその拡散

唐後半期における四川・西北地方の唐三藏西天取経伝説

唐代の密教文化に見える唐三藏西天取経伝説

宋代における唐三藏西天取経物語の成立と江南文化

「元本西遊記」の形態について

「元本西遊記」と虞集撰「西遊記原序」―丘処機の事跡をめぐって

孫悟空像の形成とその発展

猪八戒像の形成とその発展

唐太宗入冥物語と陳光藥江流和尚物語

『楊東来先生批評西遊記』劇の成立とその刊行―明前期の戯曲西遊記物語について

『迎神賽社礼節伝簿四十曲宮調』に収められる「西遊記」隊舞戯

明後期における『西遊記』の大成とその流布

清代における『西遊記』の戯曲化と絵画化

清代の『西遊記』と民間芸能

『西遊記』資料の研究、磯部 彰著 ；東北大学出版会、2007.2、475p、図版 [18] p.〈BA81592362〉

目次

第1章 総説『西遊記』物語絵史―唐代から民国まで

第2章 『大唐三藏取経詩話』研究―宋代の唐三藏物語とその書誌研究

第3章 『大唐三藏取経詩話』と栴尾高山寺・明恵上人―鎌倉時代における日宋文化交流

第4章 『唐僧取経図冊』の研究―元代の西遊記物語絵

第5章 世徳堂刊西遊記の版本研究―明代における完成体『西遊記』の登場

第6章 II（びん）斎堂刊『新刻増補批評全像西遊記』の版本研究

第7章 明末清初『西遊記』諸刊本と絵画について―楊致和編『唐三藏出身全伝』と『李卓

吾先生批評西遊記』を中心に

第8章 『釣魚船』と『進瓜記』―明清代の劉全進瓜李翠蓮還魂物語考

第9章 『昇平宝筏』と『西遊記』―清代内府劇の一断面

第10章 『昇平宝筏』の内容 — 北京故宫博物院本と大阪府立中之島図書館本
 第11章 『西遊記』資料瑣談

《HP参考資料》

中国御伽草子西遊記

<http://www9.plala.or.jp/river/site/saiyuki/>

『西遊記』は、中国、明の時代（十六世紀後半）に書かれた小説であり、唐の時代（七世紀）にインドへお経を取りに行った高僧玄奘がモデルになっている。もちろん、孫悟空や猪八戒、沙悟浄は実際に存在したわけではない。

テキストとしては唐皇帝太宗の意向で、筆が立つ僧である弁機が玄奘の口述にもとづいて西域の様子を記した『大唐西域記』と、玄奘の弟子の慧立と（げんそう）が書いた『大唐大慈恩寺三蔵法師伝』がもとになっており、玄奘の旅路が説話となって演劇、小説、詩集などと発展する過程で成立した。「西遊記とは…」より抜粋

西遊記 『つらスクール』（曹洞宗宗務庁）

<http://www.sotozen-net.or.jp/kids/goku.htm>



…と、
 こうして三蔵一行は金剛の香雲により如来のもとにかえるのですが、
 ほんとうの玄奘三蔵はたくさんの経文の翻訳にかかるとです。